



薬学部
教授
大橋 敦子

「定年を迎えて」

2003年5月に本学薬学部に着任して以来23年近くの日々が過ぎ、この3月に定年を迎えることになりました。4月からは薬学教育支援室の薬理担当として教育の機会をいただいております。ここまで教職員の皆様のご指導・ご支援をいただいて無事に勤めることができました。お世話になりました教職員の皆様、一緒に時を過ごした学生さんたち、関係者の皆様により感謝申し上げます。

私は、北海道に憧れて北大獣医に進学し薬理に興味を持ち、卒業後は東京都老人総合研究所(現東京都健康長寿医療センター)にて自律神経生理学と老化研究に取り組みました。そのご縁で鳥村佳一先生に臨床薬理毒理学教室に迎えていただき、生理学と薬理学の講義を担当してきました。着任当時、本学は薬剤師国試合格率全国トップクラスを誇っていましたが、いつのまにか時代の荒波が立ち始めていたのかもしれない。薬学部6年制がスタートした2006年度の前年から他県で薬学部が乱立して道外から来る学生が減少し、一方で薬剤師国試合格率が他の医療系国試に比べて低いことから、薬学部はコストが悪い6年制で学費がかか

る上に免許取得が難しいと人気が低下しました。そして近年、日本全体の少子化がはっきりと目に見えるようになり、荒波の中を必死で渡っている状況となっています。そのような状況の中、2025年度から薬学教育支援室に移り、学生さんたちと一緒にコツコツ勉強しています。というのは、支援室にいるとびっくする質問を直接受けるので、教えているつもりで伝わっていないことが驚くほどあることに今更ながら遅まきながら気づいたのです。

世の中がどう変わろうと、自分を助け人を助けるのは、コツコツ身につけた知識や技術であり、必死で手に入れた資格や人脈であることはこれからも変わらないでしょう。ご縁があって本学を選んでくれた学生さんたちが医療人として幸せな人生を送ってくれることを今までもこれからも心から願っています。同じ思いで協力し合ってきた教職員の皆様、お力添えをいただいた関係者の皆様に改めて感謝いたします。そして、北広島での新しい門出が本学の発展と進化に繋がっていくことを心より祈念いたします。



歯学部
教授
安彦 善裕

「顕微鏡の先で、こころと世界に出会う」

このたび、私は本年3月をもちまして定年を迎えることとなりました。振り返れば、教育・研究・診療のいずれにおいても、多くの人とのお出合いに支えられて歩んできた年月でした。

病理学を専門とした大学院を修了した後、カナダ・バンクーバーへ渡り、2年半にわたるポスドク生活を送りました。異国での研究生活は決して楽なものではありませんでしたが、研究に向き合う姿勢や国際的な視野の大切さを学ぶ、かけがえのない経験となりました。そしてその経験を経て、1992年11月に本学歯学部口腔病理学講座へ赴任しました。

2005年には、大学病院の機能があいの里へ移転したことを契機に、大学病院の口腔内科学系の教授として診療の現場に深く関わることになりました。そして2011年には、再び本学歯学部口腔病理学講座の臨床口腔病理学分野の教授として教育・研究の現場に戻り、学生や大学院生の指導に携わることとなりました。基

礎と診療の双方に関わる機会を得たことは、私にとって大きな財産であったと感じています。また、その間、国際交流にも携わり、多くの海外の大学や研究者、学生とのつながりを築く機会に恵まれました。異なる文化や教育環境に触れる中で得た経験は、私の教育観や研究姿勢をより広いものにしてくれたと感じています。

口腔内科の外来で出会った患者さんの多くは、病理学的な異常だけでは説明できない症状に悩む、いわゆる歯科心身症の方々でした。その現実に向き合う中で、人のこころと身体との関係をより深く理解する必要性を感じ、公認心理師の資格を取得し、歯科心身症の患者さんの診療にも携わってきました。歯科医療は、単に歯や口腔の疾患を治すだけのものではありません。患者さん一人ひとりを総合的に理解しようとする姿勢があってこそ、本当の意味での医療が成り立つのだと思います。

これまで出会い、支えてくださったすべての皆さまに、心から感謝申し上げます。これからも引き続き、どうぞよろしくお願ひいたします。



歯学部
教授
照光 真

「北海道医療大学でゴール」

自分の履歴書は職歴記載欄が一杯になっていきます。結局、半生以上のキャリアを大学人として過ごしてきました。キャリアとは、『働くこと+生き方』であり、その背景には4つの要素、1)経過(自分史)、2)環境(自己他者関係)、3)意志、4)偶然(実は必然か)が、作用しているとされます。自分は歯科診療の安心と安全を守る歯科麻酔医を専門としています。最初の大学は早稲田大学第一文学部 心理学専攻を卒業しています。関係ないように見えますが、心理学とは認知や行動を定量化する精神物理学的測定法が主役で、ここで培った科学的な研究手法が後の大学キャリアに役立ってきます。卒後は、出版社からテレビ局で、アナウンサーからプロデューサーまでを経験して、多種多様な人々と分野、組織に触れ、最終的には人の生老病死に思いを至らせるようになり、医歯学を学びたいと発起して、新潟大学歯学部に入学しました。歯科の分野でも歯科治療恐怖や疼痛管理は、心理学ともかかわるので、ここは自分がやるしかない、大学院は歯科麻酔へ、そして神経や脳に関する研究を新潟大学脳研究所で取り組みました。研究の師は科学に極め

て厳格で、科学研究に対する基盤を築くこととなり、ここには結局、准教授まで居ることとなりました。その後、新潟大歯科麻酔へと戻り、職歴欄の最後の行に斜倉曲折の末たどり着いたのが、2010年夏、本学でした。

救急救命には「救命の連鎖」という言葉があります。救急に携わったスタッフは次の救急機関に患者さんをできるだけ良い状態で引き継がなくてはなりません。本学での仕事は、歯科麻酔の経験、知識、考え方を次の世代へと、講座が発展できるように良い状態で次に、臨床のなぜ?どうしてを解決するために、どのような方法やアプローチで大きな問題の山を突き崩してゆかを次の臨床医や研究者へと、微力ながら繋げてゆけたのではないかと考えています。回り道ばかりしてきたキャリアですが、上記の4つの要素に揺り動かされて、ゴールにたどり着くことができました。最後に、4番目の「偶然(必然?)」がほほ笑みかけるのは、準備をしてきた者だけに対してである」という言葉があります。しっかりと備えて、みなさま、ぜひ満足のゆくキャリアをお楽しみください。



看護福祉学部
教授
白石 淳

「北海道医療大学での教員養成に携わらせていただいた日々 ありがとう」

2008年4月、臨床福祉学科に設けられた教職課程を担当するため、本学に着任しました。それ以来、自家用車で通勤する日々が始まりました。春には白鳥が舞い、田植えの風景、夏には牧草ロールと緑の山々、秋には黄金色の稲や野菜の収穫、そして冬には、厳しさのなかにも一面に広がる美しい雪景色がありました。これまで勤務してきた街中の大学や住宅街に囲まれた大学とは異なり、四季を感じながら過ごす日々でした。季節の移ろいを感じることができたことも、思い出の一つです。そのような環境のなかで、心優しい学生の皆さんとお会いし、ともに学ぶ時間を重ねてきました。学ぶことのほうが多かったのではと思うほど、私自身も充実した18年間を過ごさせていただきました。

本学の教職課程は、北海道においても貴重な存在です。高校の公民・福祉科、特別支援学校の免許課程が設けられており、なかでも福祉科の課程は道内で数少ない大学の一つです。そのため、学校現場からも大きな期待が寄せられてきました。また、今日の学校現場では、福祉の視点や力がこれまで以上に求められています。その基盤をもつ教員が、本学の卒業生であることを、誇りに思っています。教職

課程を履修した卒業生は、2025年度末で115名となり、そのうち63名が高校や特別支援学校の教職に就いています。道内外の各地で教員として活躍し、学年主任や実習指導教員として後輩を指導する立場に立っている先生方もいます。さらに卒業生である高校の先生に憧れ、本学の福祉学科に入学し、教職課程を履修している学生もおり、教職課程の思いが確かにつながっていると感じます。私は38年間の教職生活のうち35年間にわたり、幼児教育および初等中等教育の教員養成に携わってきました。振り返れば、学生の皆さんに十分なことができたのかと、反省や迷いが残ることもあります。それでも、卒業生の皆さんが、それぞれ懸命に歩んでいる姿を聞くと、喜びを感じます。

「教育とは何か」という問いに、私は今もはっきりと答えることができません。それでも、教育には人を、そして社会を変える力がある——教職生活を通して、そのことを確信しています。その大切な教育の場である北海道医療大学で定年を迎えられたことに、心から感謝しています。卒業生・在学生の皆さま、そして教員・職員の皆さま、ありがとうございました。



リハビリテーション科学部
教授
田村 至

「言語聴覚療法学科で過ごした34年間」

1992年4月に札幌医療福祉専門学校言語聴覚療法学科に赴任してから、心理学部、リハビリテーション科学部を経て、この春に定年退職を迎えました。これまで多くの先輩方を見送りましたが、このたび自分の順番がめぐってきました。私が言語聴覚士教育に携わった期間、資格に関して大きな変化がありました。赴任当初言語聴覚士は国家資格化されておらず、養成校もわずかで、本学園を含めても全国に5校程度しかありませんでした。1997年言語聴覚士国家資格が制定され、2000年から資格保持者が臨床現場で働くようになるまで、言語聴覚士(ST)は、国家資格のない状態が続いていました。国家資格制定以前に専門学校を卒業したSTは、現在は指導者として活躍されていますが、ST創成期の先駆者として、多大な苦勞を重ねたと推察します。その後、大学4年課程でのST養成が始まり、本学においても、2002年から心理学部、2015年からリハビリテーション科学部に言語聴覚療法学科が設置されました。国家資格ができたことでSTの教育システムが整備され、医療機関での地位も安定し、スタッフの増加とともに就職後の教育プログラムも充実しました。多くの医療機関で理学療法士(PT)、作

業療法士(OT)だけでなくSTも含めた3部門でのリハビリテーションが展開され、対象者に十分なリハビリテーションサービスが提供できるようになりました。STの重要性が認められて活躍の場が拡大した一方で、現在は全国的なSTの不足という課題があります。長年にわたり、「失語症」と「高次脳機能障害」に関する教育、研究、臨床を行い、「ことば」や「記憶」などの障害についての研究や臨床での知見を教育の場で伝達できたことは、楽しい経験でした。多くの卒業生が、次世代のSTを育てる指導者になっている姿をみるたびに大きな喜びを感じます。「ことば」や「記憶」など目に見えない脳機能障害の評価、治療には無限の難しさがありますが、一生を通して学ぶ価値がある分野と思います。身を挺して学ばせていただいた患者さんに感謝いたします。北海道医療大学で教育・研究に携わることで、多くの先生方や学生と交流できる場をいただいたこと、また「ことば」と「脳」についてさまざまな視点から考える機会が得られたことに深い充実感がありました。お世話になった先生方、学園関係者、卒業生、在学生の皆様へ感謝申し上げます。北海道医療大学の一層の発展を心より祈念いたします。



医療技術学部
講師
小野 誠司

「検査技師教育に携われた事への想い」

私が前職での定年が近くなってきた58歳の時に医療大学での教員へのお誘いを受け、59歳(2020年)に新規に開設される臨床検査学科の教員に迎えていただきました。前職は脳神経外科という病院でもあり、多くの患者様の様々な病態の変化や治療の甲斐なく最後を迎えられる方や、突然流行するいろいろな感染症に右往左往させられたり、新たな医療行為によって生まれる検査への対応、院内の多くの部署との調整を担当していたり、少人数での職場ということもあり、検査が関連する業務のマニュアル作成を行わなければならず、通常の検査の仕事以上の負荷が積み重なることもよくあり、ひたすらがむしゃらに勤務してきた中でも担当している検査の品質は患者様への最大の貢献であり、検査の技術向上には常に前向きに取り組んでいる毎日過ごす中、教員へのお誘いを受け、非常勤の講師などを経験し始めていたので、大学の教員のお仕事も興味がわき、2020年という令和に元号が変わると同じタイミングで教員

生活が始まりました。34年にわたる検査技師生活から、大学で助教からはじまった教員生活でしたが、検査学科の1期生から今年卒業の4期生まで関わらせていただき、自分の経験の一部は伝えることができたようにも感じます。昔以上に医療の変化も早く、さまざまな状況も講義の中では紹介できる内容を盛り込めたりも致しました。多職種によって行われる地域包括ケアセンター実習などを通して、検査技師の行える情報提供などにも参加でき、検査技師会の推進していた業務拡大に対する対応の側面を伝えることもできました。今後も様々な学生が入学され、多くの卒業生が巣立っていく事になると思いますが、北海道医療大学がますます学生の成長を促していく教育を推進されて卒業生の活躍を支える礎の形成に貢献されるよう願ってやみません。私は3月で定年となるのを契機に次のステップへと進んで行きますが、大学は教育の本質を今後も追い求めてください。大学関係者の皆様が目々々々進んでいかれますように。



予防医療科学センター
教授
岡村 敏弘

「北海道医療大学で定年を迎えるにあたって」

2018年6月に本学予防医療科学センター医療政策・医療管理学系の教授に就任してあっという間の7年10か月でしたが、実は1993年4月から本学の非常勤講師(当初は歯科補綴学、途中から歯科医療管理学を担当)をしておりまして、本学とは33年間という長い付き合いだったことになります。私は1985年3月に74期生として日本歯科大学を卒業し、1989年3月に日本歯科大学大学院歯学研究科臨床系歯科補綴学専攻(小林義典教授)を修了した後、日本歯科大学新潟歯学部歯科補綴学教室第1講座(旗手 敏教授)のもとで歯科助手を経て講師として研究、臨床・教育に従事しておりました。日本歯科大学在籍中に取り組んでいた研究と臨床は、咀嚼時の咀嚼系筋群の筋電図と3次元的下顎運動の同時計測による解析、篩分法による咀嚼能率の測定、下顎頭の3次元運動経路分析等による顎口腔機能の客観的評価、顎関節症の診断と治療法の確立、ブローネマルクインプラントチームの補綴責任者、在宅診療歯科診療チームの第1補綴責任者などです。そのようなことから、本学に着任後、各種咀嚼機能検査機器購入の要望書と予算請求を行い、保健所の許可をとって病院内に咀嚼機能検査室を設置し、小林國彦先生と一緒に咀嚼機能

検査マニュアルを作成しました。2016年度診療報酬改定で保険適用となった各種咀嚼機能検査は、その後の改定でも充実評価されており、今後の歯科における客観的な経過観察方法として重要な位置づけになると考えます。1992年8月から2018年3月まで、厚生労働技官として医療保険行政(保険医療機関及び保険医に対する指導と監査等)の業務に携わっていましたが、指導等で話す機会も多かったことから法律学を一から学び直し、慶應義塾大学法学部法律学科を2004年3月に卒業しました。慶應義塾大学法学部で医事法と刑事政策を担当されていた加藤久雄教授には在学中だけでなく卒業後もお世話になっておりましたので、本学歯学部で医事法学を私が担当することになったことは感慨深いことでした。

本学での7年10か月の間に、書籍(共著)1冊、原著論文4編、総説論文3編、学会座長2回、学会特別講演4回、学会発表18回、その他講演14回、学生講義等164コマさせていただきました。本学の教職員の皆様や学生の皆さんのおかげで大変貴重な経験をさせていただけたことに感謝するとともに、少しは本学に恩返しできたかな…とっております。ありがとうございました。



薬学部
教授
吉村 昭毅



歯学部
教授
越野 寿



歯学部
教授
入江 一元



歯学部
准教授
廣瀬 由紀人

以上の諸先生の他、
薬学部 吉村昭毅 教授、
歯学部 越野寿 教授、入江一元 教授、廣瀬由紀人 准教授が
定年を迎えられます。ありがとうございました。

With heartfelt thanks.

2025年度 理事長表彰について

2025年度の理事長表彰式が、当別キャンパスにおいて2026年1月6日(火)に執り行われ、鈴木理事長より表彰状が授与されました。理事長表彰は、特に表彰の価値があると認められた方を対象に授与するもので2025年度は以下の方が表彰されました。

◇福祉マネジメント学科精神保健福祉学講座一同<代表:橋本菊次郎 看護福祉学部・教授>
札幌刑務所における精神障害受刑者処遇・社会復帰支援モデル事業のメンバーとして協力し、その取り組みが全国的にも例がなく、複数の報道機関にも取り上げられるなど社会的・学術的に高く評価されました。



三国学長、鈴木助教、向谷地特任教授、橋本教授、奥田講師、鈴木理事長